

世界地図を 活用するときの注意点は？

富山大学人文学部 准教授 大西 宏治

地球は球体であること、それを平面に写し取ったものが世界地図であることは小学4年生にもなれば子どもたちも知っています。しかし、地球を平面に写し取るとき、どのようにゆがむのかは授業で取り上げられるまで知りません。また、子どもたちは日本中心の世界地図を繰り返し眺めることで、日本を中心とした固定的な世界観を獲得してしまいがちです。地図のゆがみを理解させ、かたよりのない世界認識を養うために、授業でどのように取り組めばよいのか、考えてみたいと思います。

1. 世界地図のゆがみ

地図帳などで示される世界地図のほとんどはミラー図法やメルカトル図法などの円筒図法です。基本的な原理は簡単で、赤道で地球に接するように円筒状にした紙を巻き付け、陸地を写し取るとできあがります(図1)。

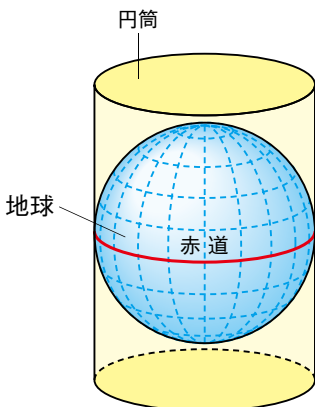


図1 円筒図法のイメージ

大陸などのおおよその形は地球上のものとは大差ありませんが、大きさ(面積)はかなりゆがみます。赤道付近は紙に接していますので、比較的正確な大きさに描かれますが、両極に近いところは紙から離れますから過大に表現されます。ですから、北極に近いグリーンランドや、カナダの北側、ロシアなどは実際と比べてかなり大きく描かれます。そこで、オーストラリア大陸とグリーンランドの大きさを世界地図と地球儀と比較してみるのはいかがでしょうかと思います。地図帳の世界地図のグリーンランドはオーストラリア大陸よりも大きく描かれていますが(図2)、地球儀を見ると、実際はオーストラリア大陸のほうが大きいことがわかります(図3)。このような



図2 地図帳上のオーストラリアとグリーンランド
『楽しく学ぶ小学生の地図帳 最新版』p.84~86



図3 地球儀上のオーストラリアとグリーンランド

体験を通じて、世界地図にはゆがみがあることが理解されると思います。

2. 世界認識のゆがみと修正

ところで、人々の頭の中の世界地図も大きくゆがんでいます。高校生や大学生にフリーハンドで世界地図を描いてもらうとどのような世界地図が描かれるのでしょうか？ 知らない地域は省略されたり、過小評価されたりし、よく知っている国は詳細まで描かれたり、過大評価されたりします。

アメリカ合衆国、カナダ、フィンランド、シエラレオネ（アフリカ）の高校生たちが描いた世界地図を比較する研究が1970年代に行われました。その結果、自国やその関連する地域が詳細に、そして過大に描かれたり、関連の薄い地域は形状や大きさが不正確に描かれる傾向にあることがわかりました。

描かれた世界地図は描き手の世界観を写し取ったものです。日本の子どもたちに描いてもらうと、日本中心の世界地図になり、日本周辺や関係の深いアメリカなどはそれなりに正確に描かれますが、アフリカなどは大きさが不正確です（図4）。国際社会に生きるこれからの人材を育てることを考えると、世界をある程度は正しく認識してもらいたいです。

そのためには、小中学校までの段階で、世界の大陸の大きさを意識した世界地図を描く機会を20分程度でよいので用意すると効果的でしょう。相対的な大きさに気を配って世界地図を描くと、それぞれの大陸の大きさが体験的に認識されます。また、近隣諸国との距離に対する感覚も育まれることでしょう。

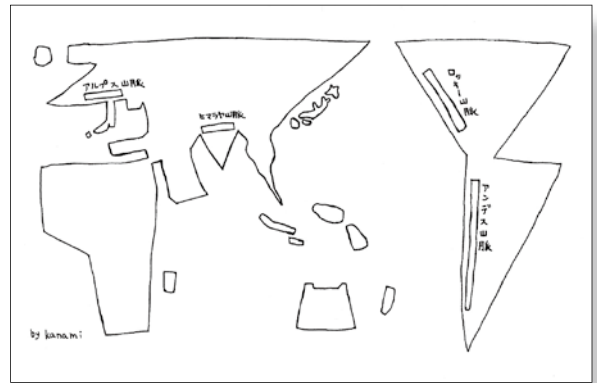


図4 日本の大学生の描いた世界地図

3. 日本の未来も世界認識から

子どもたちが大人になるころ、アフリカ諸国や南米はさまざまな意味で日本にとって重要な国になると思います。それらの国々に対する認識、少なくともどのような形をしていて、どのぐらいの大陸の大きさで……ということを、多少ゆがんでいても理解していることが、世界認識を育むうえでも重要なのです。

また、日本で目にする世界地図は日本を中心としたものがほとんどです。しかし、海外の地図を見ると、それぞれの事情に合わせて世界地図の中心はさまざまです。中心が変わると、そこから見える世界の様子は大きく変わります。日本が位置する場所は「極東 (Far East)」とよばれることがあります。大西洋中心の世界地図で見るとその理由が理解できます。さまざまな世界地図を子どもたちに見せてあげる機会を設けることで、柔軟な世界観が育まれると思います。

